

畑を買い取りなさい

[聖書]エレミヤ書 32 章 6～15 節

さて、エレミヤは言った。「主の言葉がわたしに臨んだ。見よ、お前の伯父シャルムの子ハナムエルが、お前のところに来て、『アナトトにあるわたしの畑を買い取ってください。あなたが、親族として買い取り、所有する権利があるのです』と言うであろう。」主の言葉どおり、いとこのハナムエルが獄舎にいるわたしのところに来て言った。「ベニヤミン族の所領に属する、アナトトの畑を買い取ってください。あなたに親族として相続し所有する権利があるのですから、どうか買い取ってください。」

わたしは、これが主の言葉によることを知っていた。そこで、わたしはいとこのハナムエルからアナトトにある畑を買い取り、銀十七シケルを量って支払った。わたしは、証書を作成して、封印し、証人を立て、銀を秤で量った。そしてわたしは、定められた慣習どおり、封印した購入証書と、封印されていない写しを取って、マフセヤの孫であり、ネリヤの子であるバルクにそれを手渡した。いとこのハナムエルと、購入証書に署名した証人たちと、獄舎にいたユダの人々全員がそれを見ていた。そして、彼らの見ている前でバルクに命じた。

「イスラエルの神、万軍の主はこう言われる。これらの証書、すなわち、封印した購入証書と、その写しを取り、素焼きの器に納めて長く保存せよ。イスラエルの神、万軍の主が、『この国で家、畑、ぶどう園を再び買い取る時が来る』と言われるからだ。」

[序] 孤立無援のつらい生涯

皆さん、「自分なんか生まれてこなければよかった」と思ったことがありますか。私は一度あります。戦争中の小学校時代に肺結核にかかり1年間休学しました。敗戦後の東京の中学では、教科書も食糧も不足で、午後は授業がありません。運動場で野球ばかりやって暇をつぶしました。過激な運動は控えるように医者から注意されていたのですが、体は丈夫だと過信して、野球部に入りました。そして高校1年の終わりに遂に咯血して、6年半の療養生活を余儀なくされました。学校の友人たちに取り残され、弟も大学を卒業して働き出しているのに、家で母に厄介をかけて毎日を送る惨めさ。自分の我がまま勝手さに自分で嫌気がさして、「生まれてこなければよかった、死んでしまいたい」と思いつめたのでした。

しかし私の場合、人生のトンネルは7年半でしかありませんでしたが、エレミヤは、40年以上にわたる預言者生活のすべてが、多くの人々から非難を浴び、嫌われ、孤立無援の日々でした。神さまは彼に「妻をめとってはならない。息子や娘を得てはならない」(16:1)と命じました。ですから失意の中で優しく慰めてくれる妻もいなければ、未来に希望を託す子どももいませんでした。また「酒宴の家に入るな。彼らと共に座って飲み食いしてはならない」(16:8)とも命じました。酒を飲みながらグチを聞き合い、励まし合う仲間もいなければ、近所付き合いもなかったのです。どうして神さまはエレミヤに、このように孤独な生涯を送らせたのでしょうか。

それはエレミヤが生きた時代というのが、国家が滅亡するという激動の時代だったからです。そしてエレミヤの任務というのが、このままでは北からの脅威で国が滅びるという滅亡の預言を語り続けることだったからです。先週も偽預言者ハナンヤとエレミヤとの対決を学びました。ハナンヤは、バビロンに連れ去られた第一次捕囚が二年以内にすべて帰還すると預言しました。エレミヤの預言はバビロンのくびきはもっと厳しく70年に及ぶというものでした。

人々は厳しい言葉よりも甘い言葉を求めます。手軽な平和を歓迎し、深く悔い改めることを嫌います。人々に迎合したハナンヤは、神の裁きにあつて二ヶ月後に急死してしまいました。しかしゼデキヤ王も人々もエレミヤの言葉に聞き従って、悔い改めようとはしませんでした。だから国が滅亡したのです。エレミヤはこのように呻いています。

「ああ、わたしは災いだ。わが母よ、どうしてわたしを産んだのか。国中でわたしは、争いの絶えぬ男、いさかいの絶えぬ男とされている」(15:10)。「わたしには聞こえます。多くの人の非難が」(20:10)。「わたしは一日中笑い者にされ、人は皆わたしをあざけります」(15:7)。しかし神さまは、何としても神の民を救いたかったのです。そしてエレミヤを特に選んで、つらい役割をおさせになったのでした。

誰しもが、ハッピーな人生を送りたいものです。でもエレミヤのような人生もあるということ、よくよく覚えておきたいものです。

[1] それにもかかわらず

さて今日は、エルサレムの都がバビロン帝国の大軍に包囲されて1年程経過していた時のことです。半年後には落城して国が滅ぼされます。エレミヤは獄舎に拘留されていました。この都は占領されるなどということを行いふらされては、国民の気持が沈んで、戦えません。そこでゼデキヤ王が拘留したのでした。戦争中の日本でも「一億一心」絶対に勝つという心で一つでなければなりません。戦況が不利だなどと言おうものなら、非国民と罵られ、憲兵隊や特高警察につかまりました。

そのエレミヤの許に従兄弟のハナムエルがやってきて、アナト村の畑を買い取って欲しいと願いました。土地はその一族が神さまから授かったものだから、誰かが土地を手放さなければならなくなった場合は、親戚同士で買い取って、土地を守らなければならないとされていたからです。エレミヤは定められた慣習通りに、獄舎の中で証人を立ち合わせて証書を作り、銀17シケルを支払いました。

しかしエルサレムは包囲されていたのです。城の外のアナト村は当然敵軍の占領下にあったことでしょう。エレミヤは国の滅亡を確信していました。そのような状態で畑を買い取るとは、一体どういうことなのでしょう。お金をどぶに捨てるようなものではないのでしょうか。今日の聖書箇所の手先を読み進めると、事情が分かってきます。エレミヤも契約を交わした後では、こう祈っています。

「今や、この都を攻め落とそうとして、城攻めの土塁が築かれています。間もなくこの都は剣、飢饉、疫病のゆえに、攻め囲んでいるカルデア人の手に落ちようとしています。あなたの御言葉どおりになっていることは、御覧のとおりです。それにもかかわらず、主なる神よ、あなたはわたしに、『銀で畑を買い、証人を立てよ』と言われました」(32:24～25)。

これに対する神さまのお答はこうでした。「かつてわたしが大いに怒り、憤り、激怒して、追い払った国々から彼らを集め、この場所に帰らせ、安らかに住ませる。彼らはわたしの民となり、わたしは彼らの神となる。わたしは彼らに一つの心、一つの道を与えて常にわたしに従わせる。それが、彼ら自身とその子孫にとって幸いとなる。わたしは、彼らと永遠の契約を結び、彼らの子孫に恵みを与えてやまない。

またわたしに従う心を彼らに与え、わたしから離れることのないようにする。わたしは彼らに恵みを与えることを喜びとし、心と思いを込めて確かに彼らをこの土地に植える。まことに、主はこう言われる。かつて、この民にこの大きな災いをくだしたが、今や、彼らに約束したとおりに、あらゆる恵みを与える。この国で、人々はまた畑を買うようになる。それは今、カルデア人の手に渡って人も獣も住まない荒地になる、とお前たちが言っているこの国においてである」(32:37～43)。

イスラエルを愛する神さまの熱い思いは変わらないのです。イスラエルの民を大いに怒り、追い払うけれども、彼らに恵みを与えることを喜びとするから、再び畑を売買出来る平和な国にする。その約束として、エレミヤよ、あなたが先ずアナトの畑を買い取りなさいと、おっしゃったのでした。

[2] 血の代価による契約

エレミヤが生涯を通して、滅亡という神の裁きを警告しても、聞こうとしない人々のかたくなさ。そのためにエレミヤは生まれてこなかったほうがよかったとうめき通しました。そんなイスラエルの民なのに「彼らはわたしの民となり、わたしは彼らの神となる」というお心は全く変わらないのです。そして「わたしは彼らに一つの心、一つの道を与えて常にわたしに従わせる」という期待と希望を持ち続けて居られるのです。彼らにあらゆる恵みを与える——何と言う神さまの愛でしょうか。

エレミヤの従兄弟が、獄舎に拘留されているエレミヤに頼みました。「ベニヤミン族の所領に属するアナトの畑を買い取ってください。あなたに親族として相続し所有する権利があるのですから、どうか買い取ってください」。新共同訳の「相続し所有する権利」を、口語訳は「あがなう権利」、新改訳は「買い戻す権利」と訳しています。どういう事情で売らなければならなくなったのか分かりませんが、とにかく畑が他人の手に渡らないように、一族として買い戻さなければなりません。本人に代って金を支払い、取り戻すことをあがなうというのです。

シンガポールではショッピングセンターで買い物をした時に、駐車券の裏に店が判を捺してくれます。すると駐車料金が無料になります。Redeemed(あがなわれた)という判でした。「料金が代りに支払われている駐車券」という意味です。神さまは、神さまに聞き従わず、バビロンに滅ぼされてしまうご自分の民イスラエルを、代償を支払って取り戻すという決意を、エレミヤに従兄弟の畑を買い取らせることによって、お示しになったのでした。

国が滅んでしまうという絶望的な状況の中で、イスラエルがどんなに背き続けても、神さまの愛は変わらず、イスラエルを回復させるという御心をお示しになりました。そのために「神さまに従う心を与え、神さまから離れることがないようにする」とおっしゃいました。エレミヤが40年も預言し続けて来たのに、聞き従わなかったイスラエルです。神さまは一体どうやって聞き従う民になさるのでしょうか。

エレミヤは畑を買った契約書を「素焼きの器に納めて長く保存せよ」(32:14)と命じられましたから、イスラエルが神の民に回復する時が、ずっと先の将来であることが暗示されています。でもかたくなな民が神の全き民になる日が、果たして来るのでしょうか。

その答えが、イエス・キリストです。十字架にはりつけにされ、「自分を救ってみろ」という嘲りを受けながら「父よ、彼らをお赦してください」と祈りつつ死んでいかれたイエス・キリストです。エレミヤに40年余も滅亡の預言を語り続けさせ、いざ滅亡の日が来ると、アナトの畑を買い取らせて、回復を語らせた神さま。滅亡を滅亡に終らせず、その向うに永遠の契約を結び、子孫に恵みを与えると約束なされた愛。その神の愛は、かたくなな民の罪をあがなうために神の御子イエス・キリストを十字架におつけになることで、完全に実現されたのでした。

[結] 神の愛に生きる民

イエス・キリストは、十字架で肉を裂き血を流して「彼らはわたしの民となり、わたしは彼らの神となる」という、あのエレミヤを通して約束された神さまの契約をしっかりと結んで下さいました。神さまが、神の子イエス・キリストの命という代価を一方的に支払って、滅びの中から私たちを買い戻して下さいました。ですから私たちは毎月第一日曜日の礼拝で、十字架の死を記念する晩餐式を守り続けているのです。

愛は命を持っています。愛は人を変えます。真の愛は真実に応答する愛を生み出します。「神がわたしたちを愛して、わたしたちの罪を償ういけにえとして、御子をお遣わしになりました。ここに愛があります。愛する者たち、神がこのようにわたしたちを愛されたのですから、わたしたちも互いに愛し合うべきです」(Iヨハネの手紙4:10~11)。十字架の愛は、互いに愛し合う愛を生み出すのです。私たちが愛の神の民、愛し合う民にして下さるのです。

パンと盃を共にいただきながら、愛の神さまに買い取られた神の民として生きて参りましょう。あらゆる恵みを与えるとおっしゃる神の愛に生きて参りましょう。